

# あんげろす

アニェス・ヴァルダが教えてくれること

齊藤 栄一

ベルギー生まれでフランスで活躍し、一昨年亡くなった映画監督のアニェス・ヴァルダは、その自伝的な作品『アニェスによるヴァルダ』（原題は『ヴァルダによるアニェス』）のなかで、自分の映画にとって重要なのは「ひらめき」と「創造」と「共有」だと語っている。

これはおそらく、彼女が製作する映画作品にとどまる話ではないだろう。私は西洋美術史を専門としているが、自分が充分見知っていたつもり美術作品があるとき突然いままでとは違ったことを語りかけてくることがある。もちろんその「ひらめき」をそれだけには終わらせず、説得力のある「語り」に仕上げていかなければならないが、その過程はまさに「創造」という作業にほかならない。さらにそれを論文で、あるいは授業で読者や学生に披露し、真の理解と共感を得たとき、相手と私はひとつの世界を「共有」できたことになる。

日常生活での会話からはじまって、あらゆる種類のプレゼンテーション、はてはチャペルでの奨励や説教にいたるまで、他者になにかのメッセージを発するすべての場において「ひらめき」をのがさず、それを理解可能な形あるものに「創造」し、他者とそれを「共有」という行為が成立したとき、私たちはアニェス・ヴァルダとおなじように、他者とともにひとつの作品を作りあげているのではないだろうか。

さいとう・えいち（所員）



## 教派を経験した旅程

黄 イエレム

プロテスタントには様々な教派がある。私は高校時代から韓国で最大教派である長老派教会(通合派と合同派)に通い、30代後半に神学大学院に進学する際には主要教派を比較した上、聖書を中心としながら理性、伝統、体験を重視するメソジスト神学の大学院を選んだ。メソジスト派は18世紀、英国国教会(聖公会の母体となる教会)の司祭J. ウェスレーによって興された教派で、自由意志を比較的重視しつつ、完全に至る聖化を強調している。人間は本来神から起因したのものとして、神と合一できる存在とみる東方神学の影響を受けたウェスレーの神学に接したことで、原罪で墮落した存在という否定的人間像のみではなく、神の属性へ回復できる人間像も抱く機会となった。

それ以前であるが、大学の英文科に在学中、半年ほどナビゲーター(The Navigators)という宣教団体に属していたことがある。ナビゲーターは、1933年アメリカ海軍D. トラトマン(Dawson Trotman)が、同僚に対し個人的に信仰の訓練をしたことから始まった超教派で、特徴として1対1のメンタリング、小グループでの聖書学習、聖書暗誦等によるイエスの弟子養成である。俗世界から分離された雰囲気で、霊的軍師訓練場のように厳しかったのが記憶に残る。

このほか大学在学中に、BCC(聖書通信院、Bible Correspondence Center)という機関を通じて、普通課程、研究課程、大学課程からなる通信教育で、大学課程に含まれている旧約聖書まで勉強したことがある。BCCは、現在も院長として在任しているアメリカ人宣教師B. レムシ(Bill Ramsay)が1964年に設立した文書宣教機関である。本機関は無教派と主張しているが、19世紀初期のアメリカにおいて聖書のみを強調して新約聖書の使徒教会を回復しようとした聖書復帰運動(Restoration movement)に起因するチャーチ・オブ・クライスト Church

(of Christ)に属している。同教派は韓国では1930年になって開拓し始めた小教団であるが、アメリカでは主流教派の一つ(2019年基準1934教会)で、元大統領J. A. ガーフィールド、L. B. ジョンソン、R. W. レーガンがこの教派の信徒であったという。かなり保守的で、浸礼を救いの必須条件とし、無伴奏の賛美などにみとれるように、聖書を文字通りに解釈する傾向にある。BCCでは定期的に、ハーディング大学やフリード・ハードマン大学などの元教授や現地牧師による新約解釈学、聖書考古学、聖書講解などの講座があり、(社会人として)在勤中と大学院在学中の数年間受講したが、牧師と平信徒の関係に上下関係はなく、平等な兄弟姉妹として謙虚に教えた姿は今でも深く印象に残っている。

また、カトリックに対しては常に興味を持ち、大学院入学以前に46巻からなるカトリックの旧約聖書を読んだことは、新教の聖書との違いと新旧約聖書間の中間史を理解するきっかけとなった。

結婚して日本へ来てからは、家の近くのメソジスト派の根元の一つといえる聖公会の教会に暫く通い、2012年に聖公会系の立教大学のキリスト教学研究科に在学するようになった。その際、カトリックとプロテスタント間の「中道(Via Media)」を特徴とする聖公会について理解を深めたのに加え、19世紀後半に聖書を北京語に訳した聖公会司祭シェルチェスキー(S. I. J. Schereschewsky)に感銘を受け、聖書翻訳史に興味を持つようになった。さらに、ユダヤ教について学んでいる際に、韓国語聖書の唯一神を明確に表す「ハナム」とは異なり、韓国人にとってはギリシャ神話を想起させる、多神教的用語のような日本語聖書の「神」及び「神殿」という語彙に惹かれ、日韓聖書翻訳史の比較研究に打ち込んだ。その後、初期日本語聖書と韓国語聖書の底本の一つであった中国語聖書の翻訳史と中国宣教についての理解が必要であると考え、東京大学の東洋史分野博士課程在学中には、主に19世紀初期の中国宣教師活動について研究を行った。研究を行うにあたっては、研究対象と

工藤 万里江

本年4月より客員研究員として本研究所に加えていただいた工藤万里江と申します。充実した研究環境をいただき、心より感謝です。どうぞよろしく願いいたします。

私の専門はフェミニスト神学やクィア神学と呼ばれる分野で、ジェンダーやセクシュアリティとキリスト教の関係を探っています。本年の3月に博士論文を提出し終えたところですが、自己紹介も含め、いま自身の課題と考えていることについてお話ししたいと思います。

私は修士課程を修了した後すぐにキリスト教書の編集者となって長年編集の仕事をしてきました（現在も研究の傍ら、キリスト教月刊誌の編集に携わっています）。働き始めた頃、ある先輩編集者にこう注意されたことがありました。「あなたはちょっとキレイにまとめすぎるところがあるから気をつけて」。それを言われた時は、しばし考え込みました。編集者の役割とは著者の論旨をできる限り明確にし、読者に伝わりやすくするよう提案することではないのか、と思ったからです。しかし一方で、「キレイにまとめる」ことを追求するあまりに、著者があえて曖昧なまま残している部分や、読者に委ねるための余白といったものを潰してしまっているのかもしれないとも反省しました。それ以来、編集の仕事をする際にはずっとこの言葉が頭にあります。

その後ひよんなことから改めて神学を学び始め、今に至るのですが、編集において抱え続けてきたこの課題を、自身の論文執筆においても実感しています。

周知の通り、学術論文では——おそらく文学やその他さまざまなジャンルの文章に比べても際立って——明確な問いを立て、説得力のある論拠を展開したうえで、（ある程度は）明確な結論を提示することが求められます。

しかし私が博士論文で扱ったアルゼンチン出身のクィア神学者マルセラ・アルトハウス＝リード（1952–2009

する宣教師に対して公正な視点で考証できるよう、常に無信仰的な立場で研究を行うことに努めた。博士課程在籍中に通った主な教会は、日本人と韓国人が混在しているペンテコスト教派の純福音教会であった。聖霊のバプテスマとそれに伴う証としての異言や聖霊の賜物、病気の癒やしの神癒などを特徴とするペンテコスト教派は、新教の教会史からみると20世紀初頭に出来た比較的新しい教派に属する。

博士号取得以降はテキサスに滞在し、バプテスト派教会に通いバプテスト派教会史に傾注した。バプテスト派は17世紀という早い時期に現れた教派で、カトリック教会や英国国教会などの既存教会で常に行われていた幼児洗礼を否定し、信仰を告白する信者に対してのみ授けるバプテスマと政教分離などを主張して教会伝統に正面から立ち向かった教派である。バプテスト派牧師 J. バニヤンによって第2の聖書とも云われる『天路歷程』が監獄で執筆されたのは、信仰の良心のゆえに当時抑圧されていたバプテスト派信徒の苦痛の結果である。バプテスト派はアメリカで最大教派であるが、特にテキサスでその教勢が強い。

以上、エキキュメニカルな旅程の末、私が信仰のエッセンスとして最も重じている教えは「山上の垂訓」と、M. ルターにより悲運にも「藁の書簡」と評された「ヤコブの手紙」である。こうして本紙への寄稿により、私の約30年の教派経験を顧みた次第である。

ふあん・いえれむ（協力研究員）



S. I. J. Schereschewsky

※ウィキペディアより引用

BISHOP SCHERESCHESKY IN 1895

[https://en.wikipedia.org/wiki/Samuel\\_Isaac\\_Joseph\\_Schereschewsky](https://en.wikipedia.org/wiki/Samuel_Isaac_Joseph_Schereschewsky)

年)は、神学におけるこうした「ルール」からの逸脱をこそ追い求めた人でした。彼女は美しく系統立てられた神学を批判し、そんな「作法」や「ルール」を投げ捨てて、徹底して生きた経験に依拠せよと言います。実際彼女の文章は、学術論文のルールになじんだ読者から見ると支離滅裂、情熱的に語るその内容はさまざまところに飛躍していて、とても読みにくいのです。私は論文執筆にあたりそんな彼女の言葉を必死で系統立て、読む人に伝わるように苦心して要点をまとめました。しかし、この作業によって彼女が伝えようとした何かが、しかも核心的な何かが失われてしまったのではないかという思いが強く残りました。

そもそもフェミニズムやクィアというものが、実践(運動)にせよ理論(学問)にせよ、この世界における一人一人の性/生の複雑さをこそ大切にしようとする試みだとすれば、語りえないものを無理に「キレイ」に語ろうとしない、矛盾を矛盾のまま提示する勇気こそ、これらと神学をつなぐ試みにおいて必要なものなのではないか……。それは、フェミニズムやクィアが、よく誤解されるように「男/女」「異性愛/同性愛」といった二元論的枠組みを前提としたものではなく、むしろそうしたわかりやすい構築そのものを問い直す試みだからです。

その意味で今後の自分の課題は、生の複雑さを覆い隠したり「キレイにまとめすぎ」たりすることなく、勇気を持ってそれに向き合うこと、それを共有するための豊かな表現方法を見つけることです。それは字数や形式の決まった学術論文においてはなかなか難しいことなのかもしれませんが、決して不可能ではないはずです。事実、語りの豊かさを見せてくれる論文にもたくさん出会ってきました。

当研究所では文学、歴史、思想などさまざまな角度からキリスト教研究が行われており、その蓄積にも圧倒されます。ここでの学びを通して豊かな語りに触れ、自身の研究の手がかりとできるよう励んでいきます。

くどう・まりえ(客員研究員)

## 雑録

今年度、当研究所の主任を務めることになった。私はこれまで受洗する機会に恵まれていないが、国際基督教大学から明治学院大学へと、キリスト教主義の大学に馴染み、礼拝堂のあるキャンパスに親しんでいる。そのような縁もあるためか、普段の生活のふとした瞬間に、クリスチャンであった母方の祖父のことを思い出す。福岡県で小さな診療所を営んでいた祖父は、私が大学に上がる頃に闘病のすえ亡くなった。

クリスチャンであった、というよりも正確には、そうであることが死の間際に判明したというほうが正しい。闘病中も周囲の人間の多くは、祖父が洗礼を受けているとは知らず、訃報を耳にして仏式の葬儀に臨むつもりでいた。参列者のほとんどに馴染みのない教会式の葬儀の場で、縁戚の女性が離別を悲しみながら、「夜通し偲ぶつもりだったのに、なんだかあっさりして物足りないものね」と困った笑顔を浮かべたのを鮮明に覚えている。祖父は京城帝国大学を卒業したのち、軍医として満洲に赴いたのだが、退役を経て、戦後の早い時期に洗礼を受けていたらしい。詳細は祖母も母も知らなかった。

私は幼少期から年一度、夏の帰省時に祖父と過ごすみで、戦争の話をお互に交わすことはなかった。記憶する限り、祖父からそのような話題がでたこともない。葬儀後に祖母から聞いた話では、最晩年の祖父は就寝後の夢見が悪いとき、満洲に赴く船上にいるのだという。また私自身は祖父が歌う姿を記憶にとどめていないが、母によれば、かつて晩酌で微酔した祖父が「同期の桜」を口ずさみ、ひとり涙することがあったという。

これらの逸話は、私の知らない祖父の戦争経験につながる断片として強く印象に残った。祖父にはどのような戦争経験があり、その経験が洗礼を受けた理由にどれほど関わっていたのか。身内には決して多弁ではなかった祖父は、親しい友には受洗に至る経緯と内的必然を語っていたであろうか。それとも他者とは分かちがたい自己

決定として、誰に伝えることもなく一生を過ごしたのであろうか。

このような問いは、時間の経過により薄らぐことなく、研究関心から敗戦前後の個人文書に接する機会が増え、本学に奉職し、当研究所との縁が深まるに至り、年々大きく迫るように感じられる。当研究所の運営に微力を尽くしながら、解き難く、同時に忘れ難い歴史と信仰をめぐる問いとして、個人的に向き合ってみたい。ごく私的な思い出に属する事柄ではあるが、着任に際する所感として、初めて担当する本欄に記す次第である。

田中 祐介

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動（2021年4月～2021年6月）

2021年度アジアキリスト教歴史文化講義シリーズ

（各回 18:40-20:10）

第1回 5/18（火）「中国近代知識人のキリスト教理解」

講師：朱海燕 協力研究員

第2回 6/1（火）「東アジア近代史とアメリカ宣教政策」

講師：李省展 協力研究員

第3回 6/15（火）「遠藤周作とキリスト教」

講師：増田斎氏

（総合研究大学院大学博士後期課程在籍、京都ノートルダム女子大学非常勤講師）

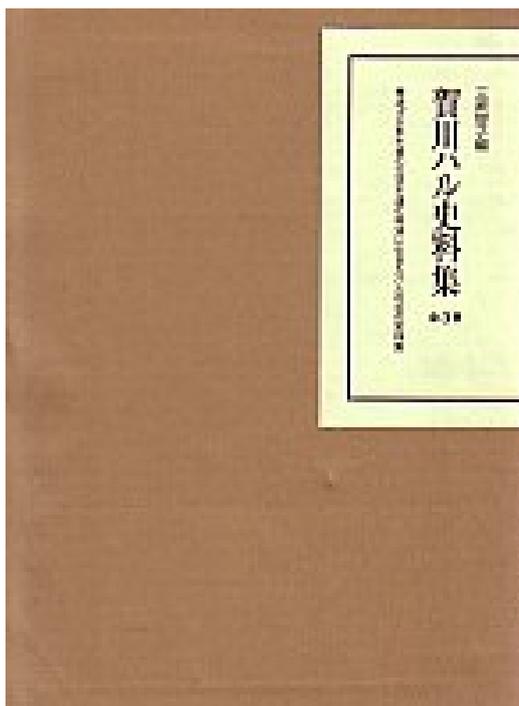
第4回 6/22（火）「音楽とキリスト教」

講師：長谷川美保 協力研究員

新着図書

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版、2021。
- ・『賀川豊彦研究』第69号、本所賀川記念館、2020。

- ・『オックスフォード キリスト教辞典』E. A. リヴィングストン編、木寺廉太訳、教文館、2017。
- ・『賀川ハル資料集』全3巻 三原容子編、緑蔭書房、2009。
- ・『雲の柱』全19巻 緑蔭書房、1990。
- ・『神の國新聞』全10巻、補巻1、別巻1、緑蔭書房、1990。
- ・『火の柱』全4巻 緑蔭書房、1990。



2021年度メンバー

所長 徐 正敏

主任 田中 祐介

所員

教養教育センター：植木 献、篠崎美生子、嶋田 彩司、中野 綾子、永野 茂洋、吉岡 拓、渡辺 祐子

文学部：久山 道彦、齊藤 栄一

経済学部：手塚 奈々子

社会学部：坂口 緑、佐藤 正晴、深谷 美枝

法学部：鍛冶 智也

国際学部：久保田 浩、森 あおい

(以上18名)

名誉所員

鶴殿 博喜、遠藤 興一、大西 晴樹、小田島 太郎、加山 久夫、佐藤 寧、

司馬 純詩、柴田 有、辻 泰一郎、中山 弘正、新倉 俊一、橋本 茂、

播本 秀史、真崎 隆治、丸山 直起、水落 健治、森井 眞、山崎 美貴子

(以上18名)

客員研究員

工藤万里江、村上 志保

(以上2名)

協力研究員

Andrew H. Ion、李 相勲、李 省展、李 恵源、稲垣 久和、今村 正夫、岡田 仁、岡田 勇督、岡部 一興、

岡村 淑美、柿本 真代、勝俣 誠、加藤 拓未、金丸 裕一、木村 一、清澤 達夫、國津 信一、

小林 孝吉、齋藤 元子、坂井 悠佳、佐藤 飛文、朱 海燕、徐 亦猛、鈴木 進、高井 啓介、高井 ハー 由紀、

高橋 一、竹田 文彦、崔 善愛、近松 博郎、辻 直人、土肥 歩、豊川 慎、中井 純子、中西 恭子、

西元 康雅、長谷川 美保、黄 イェレム、裴 貴得、牧 律、松谷 曄介、丸山 義王、三野 和恵、宮坂 弥代生、

村上 文昭、八木 隆之、横山 正美、吉馴 明子

(以上48名)

教学補佐

高橋 英里

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第85号

---

2021年7月12日 発行  
明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩